

水道管破裂事故を振り返って

橋本 明日香

自宅から人環・総人図書館へ向かう途中、年末の水道管破裂事故が無かったら...と考える事がある。例年どおり仕事納めをし、新たな気持ちで新年を迎えることができただろう。しかし2004年の年末年始はマスクに軍手をはめてカビとほこりが舞う中で仕事をする事となった。

12月24日、図書館に着くと入り口には『臨時休館』の張り紙がしてあった。館内では職員がエレベーターでブックトラックに本を乗せて運びだしている。詳しく話を聞くと12月22日の午後8時以降にその事故は起こったという。1階閲覧室の洗面所の水道管が破裂、水が噴き出し、床が浸水したのであった。見回りの警備員が異常に気づき、連絡がとれた図書館職員2名が真夜中にかけて床上数センチのところで浸水を食い止めることができた。

しかし、閲覧室に床上浸水した水がひび割れた床を通過して、地下1・2書庫の天井をつたわり、配架されている資料が濡れてしまっているということだった。

急いで書庫に降りてみると、床は滑りそうなぐらい濡れており、天井からは雫がポタポタ落ちてきている。その光景を見て、しばらく呆気にとられてしまったがたたずんでばかりではいられない。かといって、むやみやたらに動き回っても仕方がないので、指示を仰ぎながらこの水道管破裂事故で被災した資料の処理をおこなうこととなった。

まず、書庫一帯を点検し、少しでも濡れている図書、雑誌、地図資料などを抜き出してブックトラックに乗せて2階大閲覧室へ運び、資料を机の上に並べる。スペースの都合上、数冊重ねて置いたり立てて並べてみるが、これでは表紙同士がくっついたり、変形する恐れがある。結局全て一冊ずつ机に並べ、また床一面にも紙を敷き詰めて、その上に図書を置くことにした。

このように一つの作業を行うのにも試行錯誤の状態である。

被災した資料は全部で約3500冊、資料が約250点に及び、無事に処理する事ができるのだろうかと不安がよぎる。

次に水損の酷い図書とそうでない図書をわけた。被害がひどいものになると表紙がはがれおち、背や標題紙が欠落、ページが密着してしまっているといった状態である。

それら図書の水分を吸収するため、1ページごとにわら半紙を挟み込むという気の遠くなりそうな作業を開始した。和装本や明治から昭和初期の古い本は紙自体も薄く、破損しないように慎重に扱った。

ページ数が多いものであれば1冊1時間以上かかり、これでは職員だけでは到底追いつかないので学生アルバイトの方たちにも手伝ってもらった。

地図資料も同じく、水損のひどいものとそうでないものにわけ、ひどいものは破損するのを避けるため専門業者に壁面につるしてもらい、カビの発生を防ぐため陰干しをした。

水損被害がそれほどみられなかった資料は、巻いた状態で日の当たらない机の上に置いておいた。

図書の水分吸収作業はほとんどアルバイトの方達に任せ、職員は水損資料の記録作業にあたった。リストを用意し登録番号、請求記号、タイトルなどを書き込む作業である。

破損がひどく背ラベルがはがれているものや標題紙、表紙が欠落しているものは資料を特定するのに苦労した。

年末の作業はここで終了し、年が明けてから地図資料の記録にとりかかった。

資料はすでに乾燥していたがカビが発生していたり、そり・シミがきている資料があった。

まずは壁面につるしてあるものから図書と同じく、登録番号、請求記号、タイトルをリストに書き込んだ。吊るしてある資料も巻いてある状態の資料も破損しないように慎重に取り扱いながらの作業であった。

こうして資料の記録が終わり、ほぼ乾燥した時点で図書はダンボール箱に詰め、専門業者に外注し燻蒸処理を行った。地図資料も専門業者にて修復作業中である。

そして、本来開館予定であった1月6日を12日に延長し、なんとか図書館を開館する事が出来た。

現在、三高資料室に燻蒸処理から返ってきた図書が眠っている。まだ現物は見ていない。果たして元の姿に戻っているのだろうか。

これから、この図書に『水道管破裂被災資料』の押印する作業が待っている。この作業が終了すれば元通り書庫に配架されることになっている。

以上が自分が携わった水損事故の処理に関してである。もちろん、これはほんの一部で、ほかにも処理や事務手続きに駆けずり回った方々のご尽力で開館にこぎつけたのだ。

この水損事故で、冬期休館期間を延長することになり、現在も利用できない資料もある。利用者には迷惑をかけることになってしまった。散々な出来事であったが、この事故が無ければ書庫に埋もれていた地図資料を広げて見る機会などなかったかもしれない。図書館で起こる災害についての危機意識を改めて考える事になったし、水損した図書の処理法も身を持って体験できた。

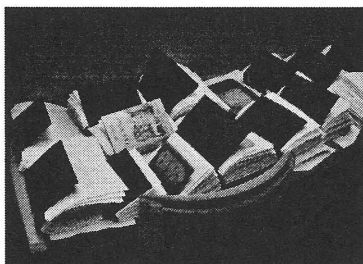
年末から年始めはこの水害に振り回されることになったが、その中から得る事もあったのだ。

などと考えていると車のクラクションが鳴り、我に帰った。赤信号を渡ろうとしていたのだ。

水道管破裂事故のことを考えながら交通事故にあたりしたらそれこそ目もあてられない。

(はしもと あすか、人間・環境学研究科総合人間学部整理掛)

Photo Album 6



吸水紙を挟んだ状態の図書
吸水紙は何度も交換することが望ましい